

インタラクティブ空間演習 (女子美術大学大学院)

「テキスト統辞」のためのコード

3章 「4. 『テキスト』と〈話す主体〉」 pp.160-172 (2014-12-03)

池上嘉彦 著「III. 創る意味と創られる意味—意味作用をめぐる—」、『記号論への招待』

担当： 石井 拓洋
ishii05042@venus.joshibi.jp

2014

「コードにおける『意味論』的な規定と『統辞論』的な規定 pp.123 - 124

【記号論の3つの分野】 (前回)

- 意味論 semantics
「記号」とその「指示物」の関係について
- 統辞論 syntactics
「記号」と「記号」との結合について (統語論、構文論とも)
- 実用論 pragmatics
「記号」とその「使用者」の関係について (行為論とも)

※ そのもとの出典：W.モリス『記号理論の基礎』(1938) C.S.パースの弟子。(池上, 45)

第III章 創る意味と創られる意味

4. 「テキスト」と〈話す主体〉

(pp.160 - 189)

「統辞的単位」と「テキスト」 pp. 160-161

- 「統辞的単位」とは
 - ※ 「記号」の配列を規定する統辞規定によって生み出された複数の記号による〈かたまり〉のこと (SVO とする一つの節など)。
 - ※ 例) 主語+述語からなる「節」、または「句」など。
- 「テキスト」とは
 - 「『テキスト』は『統辞的単位』から成るさらに高次の複合的な単位」 (池上, 161)
 - ※ 要するに、文が集まって成立した〈文章全体〉のこと。

「統辞的単位」と「テキスト」 pp. 160-161 (池上, 161)

- 「テキスト統辞」とは？
 - 単語の配列を規定する統辞規定
S V O C = 「統辞的単位」

↓

- 「統辞的単位」の配列を規定する統辞規定 = 「テキスト統辞」
S V O C S V O S V O O S V C = 「テキスト」

※ しかし「テキスト統辞」とは、一体、実際に存在する？しない？

「言語」の場合 pp.161 - 162

- 言語にみる「論弁的」な統辞構成とは？

「統辞的単位」= 文 「統辞的単位」= 文 「統辞的単位」= 文

● ★ ○ ● ★ ▲ ※ ▲ ※

~~~~~

- 「論弁的」discursive な統辞構成  
「[文] がつぎつぎに提示され、先行する連鎖によって伝えられた情報に、後続する連鎖によって運ばれる情報がつぎつぎに組み込まれていく」(池上, 161)

「テキスト統辞」のためのコード pp.162 - 163

【テキスト統辞に求められる2つの「整合性」】

・1. 「ミクロ的な整合性」

「『テキスト』が構成されるためには、構成する単位（※ = 一つの文）の間に何らかのつながりがなくてはならない」（池上, 162）

「ミクロ的な整合性」が見られる例。しかし、

「火山が爆発した、爆発は危険だ、危険なのは戦争だ、戦争を防ごう、そうすれば火山の爆発も防げる」

しかし、全体 = 「テキスト」としては意味がおかしい (= 「マクロ的な整合性」なし)。

「整合」 = ずれや矛盾がないこと

「テキスト統辞」のためのコード pp.162 - 163

【テキスト統辞に求められる2つの「整合性」】

・2. 「マクロ的な整合性」

「『テキスト』全体の構成に関する整合性を『マクロ的』な整合性と呼ぶ、...。 [例えば、部分的には理解できるのだが] 全体として何を言いたいのかよく分からない」

— このような印象は、テキストの「マクロ的」な整合性と関係していることが多い」（池上, 163）

「犬が吠えた、ワンと吠えた、ワンと言えば1、1はイチローを思い出す、イチローはジローに似てる」

部分的には理解できる。しかし、全体として、何を言いたいのか???

「ミクロ的な整合性」 pp.163 - 168 (池上, 163)

【テキスト統辞に求められる2つの「整合性」】

1. 「ミクロ的な整合性」(文と文との整合性) について

「ミクロ的な整合性」に求められること、それは、前後に位置する文同士の「情報の連続性」

前の文 = 「旧情報」      後ろの文 = 「新情報」



情報「○☆」が前後の文の間で受け継がれている。つまり「情報の連続性」あり。

「ミクロ的な整合性」 pp.163 - 168 (池上, )

【テキスト統辞に求められる2つの「整合性」】

1. 「ミクロ的な整合性」(文と文との整合性) について

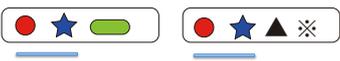
ミクロ的な整合性の確立のための  
たとえば、4つの手段

「ミクロ的な整合性」 pp.163 - 168 (池上, 165)

【テキスト統辞に求められる2つの「整合性」】

1. 「ミクロ的な整合性」(文と文との整合性) について

手段1. 同じ情報の部分的な〈反復〉



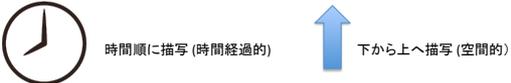
- ・「太郎は勝った、太郎は泣いた」 (同一語句の反復)
- ・「太郎は勝った、彼は泣いた」 (代名詞を使用した反復)
- ・「太郎は勝った、少年は泣いた」 (他の語句による言い換え)
- ・「太郎は勝った、泣いた。」 (「ゼロ形式」による繰り返)

「ミクロ的な整合性」 pp.163 - 168 (池上, 165)

【テキスト統辞に求められる2つの「整合性」】

1. 「ミクロ的な整合性」(文と文との整合性) について

手段2. 描写順序の事前の〈取り決め〉



- ・「火山が爆発した、水が美味しい、太郎が歩いた」 (時間経過的な描写ならば理解も可)
- ・「花屋がある、事務所がある、客室がある」 (空間的な描写とあらば可。1Fから3Fへ)
- ・「志井さんだ、海江田さんだ、石原さんだ」 (空間的な描写とあらば可。左から右へ)

描写する「対象」の構成、在り方に依存している手段。

「ミクロ的な整合性」 pp.163 - 168 (池上, 165)

【テキスト統辞に求められる2つの「整合性」】

1. 「ミクロ的な整合性」(文と文との整合性) について

### 手段3. <接続詞>などによる関係性の表示

文と文との接続関係を示す「接続詞」や「副詞(句)」

|       |        |               |
|-------|--------|---------------|
| 1. 付加 | 「そして」  | : and         |
| 2. 逆接 | 「しかし」  | : but         |
| 3. 理由 | 「なぜなら」 | : because     |
| 4. 帰結 | 「だから」  | : therefore   |
| 5. 例示 | 「たとえば」 | : for example |
| 6. 換言 | 「つまり」  | : I mean      |
| 7. 対比 | 「一方」   | : while       |
| 8. 転換 | 「さて」   | : now         |

「ミクロ的な整合性」 pp.163 - 168 (池上, 165)

【テキスト統辞に求められる2つの「整合性」】

1. 「ミクロ的な整合性」(文と文との整合性) について

### 手段4. 文法範疇の「時制」・「法」・「相」

- 「時制」(tense) = <過去><現在><未来>を示すことで、前後の文の時間関係を表現。  
 ※例: 「私は東京で生まれた(過去)。いずれ、札幌で住むでしょう(未来)」

- 「法」(mood) = <現実>と<非現実>を示すことで、前後の文の「虚実」の関係を表現。  
 ※例: 「私は東京で生まれた(直説法)。ああ、札幌で生まれていればなあ(仮定法)」

- 「相」(aspect) = <継続的な事>と<瞬間的な事>などで、前後の「様態の変化」の関係を表現。  
 ※例: 「私はかつて東京で暮らしていた(過去完了)。でも、しばしば旅行へでかけた(過去)」

「ミクロ的な整合性」 pp.163 - 168 (池上, 167)

【テキスト統辞に求められる2つの「整合性」】

1. 「ミクロ的な整合性」(文と文との整合性) について

ミクロ的な統辞関係をしめす手段をつかって、  
 言語という記号体系は、「実の世界」(※ 事実の世界)への依存から解放されて、  
 自ら、言語による「虚の世界」(※ 物語の世界)を自由に創り出す可能性を持つようになる。

例)

1. 体験した出来事を、時間的に逆の順序で回想すること(「時制」 tense の工夫)
2. 現実の出来事を非現実であるかのように見立てること(「法」 mood の工夫)
3. 因果関係のない所に、関係の存在を想定してみること(接続詞などによる工夫)

「マクロ的な整合性」 pp.168 - 172

【テキスト統辞に求められる2つの「整合性」】

### 2. 「マクロ的な整合性」

「マクロ的な整合性」 pp.168 - 172

【テキスト統辞に求められる2つの「整合性」】

### 2. 「マクロ的な整合性」

・「マクロ的な整合性」: 文と文が集まって出来た文章 = 「テキスト」全体に関する 整合性。

・このような 文章全体の「整合性」を得るための規定 = <テキスト>レベルの統辞規定

一体、このような テキストレベルの統辞規定 は存在するのか?

「マクロ的な整合性」 pp.168 - 172

【テキスト統辞に求められる2つの「整合性」】

### 2. 「マクロ的な整合性」

・「マクロ的な整合性」: 文と文が集まって出来た文章 = 「テキスト」全体に関する 整合性。

・このような 文章全体の「整合性」を得るための規定 = <テキスト>レベルの統辞規定

一体、このような テキストレベルの統辞規定 は存在するのか?

「そのような規定は一般的な形では存在しないように思われる」(池上, 168)

「マクロ的な整合性」 pp.168 - 172 (池上, 169)

【テキスト統辞に求められる2つの「整合性」】

2. 「マクロ的な整合性」

テキストレベルの統辞規定は、  
一般的な形では存在しない(池上, 168)

しかし

小論文の教科書にはそれらしい規定もある。つまり、、、  
各段落内では文は  
「トピック + 展開 + 結論」  
の形で配置すべき、との規定もある。これはテキストレベルの統辞規定では？

「マクロ的な整合性」 pp.168 - 172 (池上, 169)

【テキスト統辞に求められる2つの「整合性」】

2. 「マクロ的な整合性」

〈テキストレベルでの統辞規定〉にかかわる  
「マクロ的な整合性」にみる2つ特徴

「マクロ的な整合性」 pp.168 - 172 (池上, 169)

【テキスト統辞に求められる2つの「整合性」】

2. 「マクロ的な整合性」

〈テキストレベルでの統辞規定〉にかかわる  
「マクロ的な整合性」にみる2つ特徴

「マクロ的な整合性」 pp.168 - 172 (池上, 169)

【テキスト統辞に求められる2つの「整合性」】

2. 「マクロ的な整合性」にみる2つの特徴

特徴1.  
テキストの性格によって、「テキスト統辞」の規定は変わる

- テキストのジャンル 毎に〈規定の内容〉が変化する。  
- テキストのジャンル 毎に〈規定の拘束力〉の程度が変化する。

例)  
- 〈科学論文〉では 段落内を「トピック・展開 + 結論」として文を配置すべき。  
- 〈日常会話〉では、むしろ、もっと 〈ラフ〉に話をすすめたい。  
- 〈ナンセンス詩〉では、もっと 統辞 を実験的に扱いたい。

「マクロ的な整合性」 pp.168 - 172 (池上, 170 f.)

【テキスト統辞に求められる2つの「整合性」】

2. 「マクロ的な整合性」にみる2つの特徴

特徴2.  
特定のジャンルのテキストには、明確なテキスト統辞が規定。

- 「なぞなぞ」のテキストでは、「叙述 → 矛盾的叙述」(c.f. 170 f.)  
- 「民話」のテキスト (c.f. 171)

「マクロ的な整合性」 pp.168 - 172 (池上, 172)

【テキスト統辞に求められる2つの「整合性」】

2. 「マクロ的な整合性」としての起承転結など

・起承転結などは、厳密な意味内容の規定というよりも、気分的な規定といった性格

- したがって、むしろそこはテキスト生産者の技術の見せ所となる場  
- 起承転結などのテキスト統辞は、日・米など、異なる文化圏では、異なる評価が与えられることが知られている。